

放流技術開発調査（ヒラメ）

早川 豊・小倉大二郎・奈良 賢静・田中 俊輔

中嶋 潤

発 表 誌 名

昭和61年度放流技術開発事業報告書（ヒラメ班）、昭和62年3月、P20-48

抄 録

- (1) 天然ヒラメの着定期は、7月下旬～8月上旬と思われ、55年調査以来最も遅かった。本年の海況は低めに経過し、例年浮遊期に当たる7月の表面水温は2～3℃低く、これが着定期の遅れや生残に影響を及ぼした要因と考えられる。
- (2) 稚魚の着定尾数は9万尾と推定され、59年の約1／70で極めて少ない値となり、次年度以降の漁獲動向が注目される。
- (3) 1才魚の時期的分布場所、分布密度は放流場所の選定及び、今後の大量放流の継続の中で考慮すべき点となる。
- (4) ヒラメ稚魚は日の出前後にアミ類と魚類を、日没前後に魚類を摂餌しているが、水域のアミ類、シラス類の分布密度差により変化する。
- (5) 人工種苗放流の再捕例では、放流後2年経過しても最大移動距離は50kmであり、移動は狭い範囲にとどまっている。
- (6) 鰺ヶ沢市場での推定漁獲尾数は163,044尾で、このうち5,824尾（3.58%）が体色異常魚であった。体色異常部位は胸鰭を中心とした鰓蓋周辺部と尾部から尾鰭に至る部分が極めて多かった。
- (7) 体色異常魚、正常魚の全長と体幅の比率からは、人工魚と天然魚との判別は不可能と思われた。